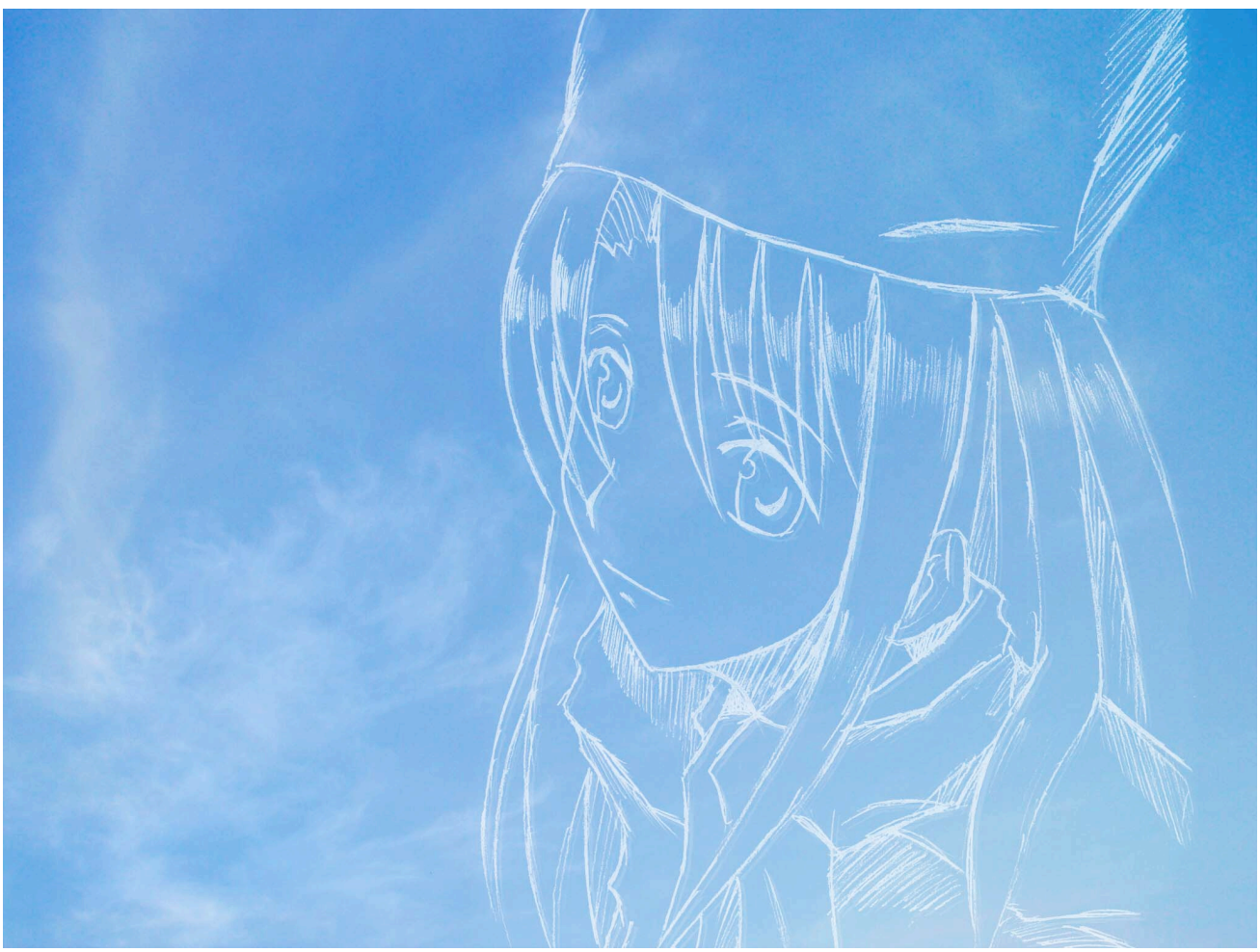
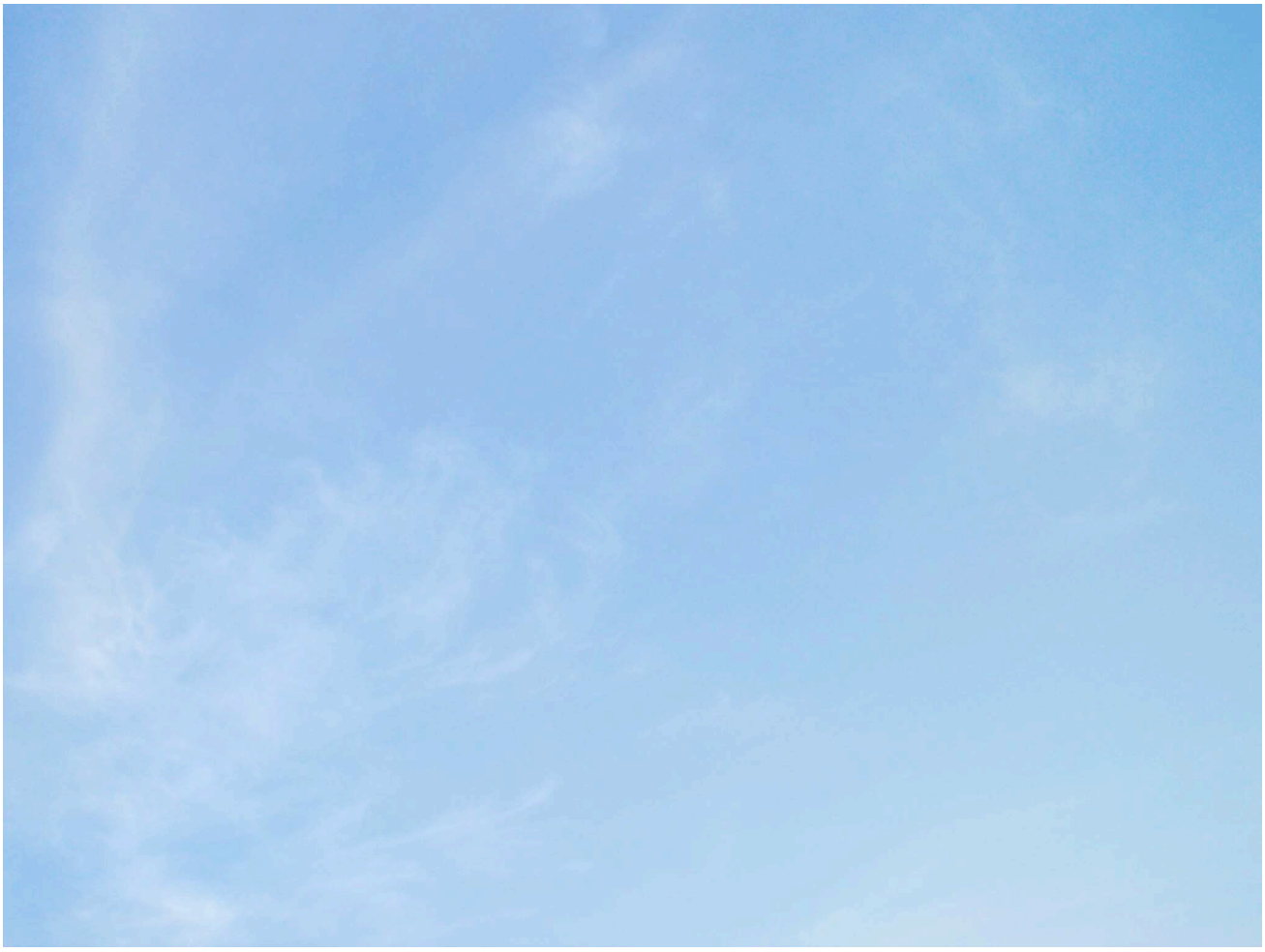


Fate/stay night　サイドストーリー

After Unlimited Blade Works.
――"sunny day"



青い空に白く

狗とかタコとか

「は――ぁ!?」
　あまりの突拍子のなさに、俺は唖然として立ち尽くした。
「と、遠坂？」
　……なんだよ、おい。なんの冗談なんだ――と、あんぐり開け放っていた口をなんとか動かす。
「な、なによ」
　問われた遠坂はといえば、俺が驚いてるのが心外だと言わんばかりに、すんと拗ねた表情をしている。――その頬を真っ赤に染めて。
「って、なんで遠坂が赤くなるんだよ……」
　仕掛けてきたのはそっちじゃないかと、俺は文句を言った。被害者はこちらなのだから、せめてなんの意味があってなのかぐらいは説明して欲しいものだ。
「し、仕方ないじゃない。恥ずかしいんだから、こっちだって」
「いや、だからってなぁ」
　心底呆れている感じをあからさまに出して、理由になってない理由に切り返す。
　恥ずかしがってるのは、見ればわかる。その理由を聞いているのだ。それに、だったらやらなきゃいいじゃないかと思うのは、至極自然なことだろう。
「シロウ、あの……」
　そこへ、同じように真っ赤になって決まりが悪そうにモジモジとしていたセイバーが、おずおずと割り込んできた。
「セイバーもどうしたんだよ。急に」
　十中八九どころか十二、三ぐらいは遠坂に唆されたんだろうと予想はしながら、それに応える。悪いのは遠坂なんだろうから、セイバーを責める気はさらさらない。
　すると――
「これは、その……凛が……」
「あ。こ、こら、セイバー。つ、使い魔がマスターに責任をなすりつけてどうするのよ」
「そ、そんなこと言われたって、事実なんですからしょうがないじゃないですか」
「たとえ事実だって、庇おうとするのが使い魔の本分ってモノじゃないの？」
「お言葉ですがマスター――」
　まあ、面白いほどに予想通りの展開が、目の前で繰り広げられ始められるのだった。
　ただ、これはヨクない。コレは、世にも恐ろしい諍いに発展しかねないのだ。
「ま、まあ……二人とも。喧嘩は良くないぞ。喧嘩は」
　致し方なく、俺は仲裁に入った。それがどれだけ危険なことかわかってるつもりではあるが、マジで致し方ない。
　なにせ、この世にも恐ろしい諍いが始まったら最後、怒りのベクトルは、最終的にこちらに向くに違いないのだ。もちろん二人共のが。
　ついさっきもなんとか死線を潜り抜けた――というか先延ばししただけだったりするが――ばかりだというのに、再び死地に送られてはたまらない。
「――士郎はちょっと黙ってて」
「ええ。これは私と凛の問題ですので」
　が、時既に遅し。言い含めたかのように同時にピシャリと言う二人の瞳には、それぞれ赤と白の炎が渦巻いていた。
「ならせめて、家に帰ってからにしてくれ。騒ぐ場所じゃないぞ？　ここは」
　しかし、ここは俺も引き下がれない。保身はもちろんだが、他にも理由がある。
　ムンと気合いを入れて言いながら見回した周りには、縦長の直方体が林立している。黒光りしているもの、灰色のもの、同じく灰色でも斑に黒が混ざったものなどなど――わかりやすく言えば日本式の墓石が。
　つまり俺たちが今いるのは、霊園というわけだ。いくらなんでも、ここで騒がれてはたまらない。実はあの戦いのとき外人墓地でドンパチやっていた

気がするが、それはそれ。避けられるものならば、避けるに越したことはないだろう。

それに、俺たちのすぐ前にあるものに刻まれている文字は、『衛宮家先祖代々の墓』。

その文はただの決まり文句で、先祖代々だなんて言っても実際に入ってるのは親父である衛宮切嗣ただ一人だ。親父の親戚なんて知らなかったし、もちろん実家の墓がどこにあるかは今も知らない。そんなわけで、親父が死んだときに建てた墓だった。

それでもこれを根こそぎ焦土にされるのは、心苦しいってどころじゃない

ちなみに、多分お釈迦様なんて信仰してなかったはずの親父（俺だってだけど）の墓がコレになったのは、藤ねえの差し金だった――んだと後で知った。

当の本人が、

『やっぱりお墓といえばアレだわよね～』

だなんて話してくれたわけだ。それも、ニコニコと笑いながら。そのニコニコっぷりは、今思えば藤ねえなりの気の遣い方だったんだろう。

それはさておき。

肝心の二人はといえば、

「ふん。しょうがないわね」

「わかりました。では凛、続きは帰ってからということで」

「ええ。そうね」

どうやらわかってくれたらしい。なんとか命拾い――いや数時間の執行猶予に過ぎないが――したようだ。

四月四日、午後二時三十分。

そんなわけかどうかはしらないが、俺と遠坂、そしてセイバーの三人は、親父の眠る場所にいる。